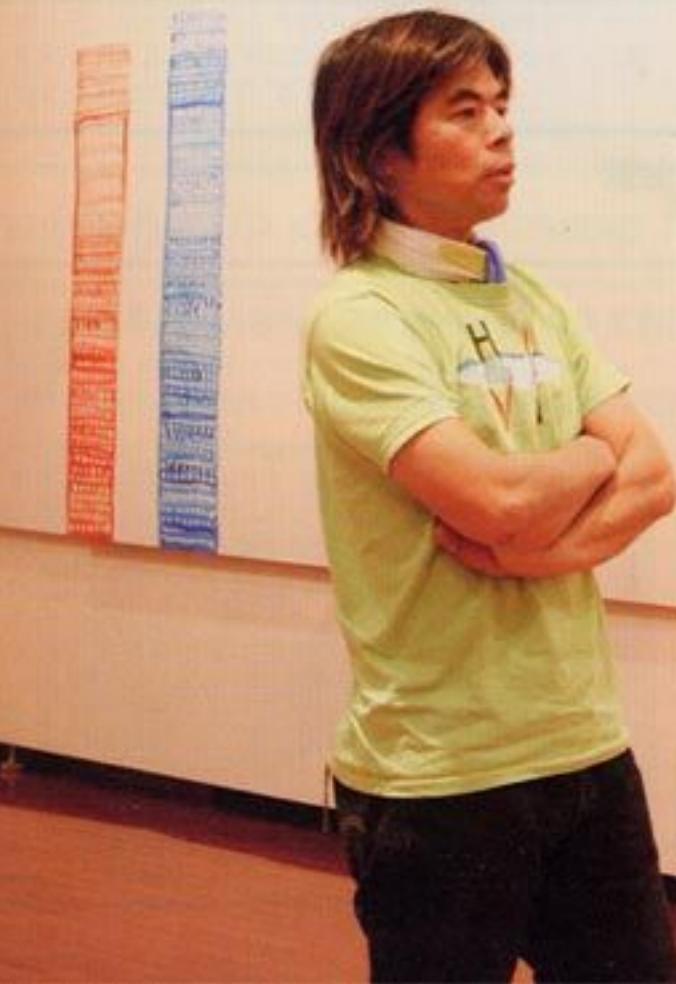


ARTkiss LETTER

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE Contemporary Art Museum, Kumamoto

熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp> [2008.春号] **vol. 36**



日比野克彦展 オープニングまでの密着取材!

12月10日より、展覧会設営のために日比野さんが来熊。
途中、とんぼ返りで東京に戻られたりしながら、
3日間みっちりと会場を仕上げていきました。
特に、明後日新聞社コーナー入口の「DAY AFTER TOMORROW」の文字、
朝顔のつるの装飾などは、熊本で制作が急遽決まったもの。
スタッフやボランティアさんと深夜まで設営を行った必見の労作です。
また、アーティストトークや、HIBINO CUP、蔦屋書店でのトーク＆サイン会など、
充実したオープニングの数日間となりました。(A.S)

Museum information

明後日朝顔プロジェクト2007熊本収穫祭 2007.10.30-11.30

春からHIGO BY HIBINO日比野克彦展のプレイベントとして始まった明後日朝顔プロジェクトは、熊本市内の5箇所(城東小学校、上通、下通、新市街、当館)で実施されました。日も短くなった秋、各地で朝顔の種の収穫祭が行われました。

城東小学校のプールを囲むフェンスになった種は、弾け飛ぶ前に保護者等の手によって数回採種されていましたが、10月30日には、終幕として日比野さんを講師に迎え、種についてのお話と、種を入れる船の工作をするワークショップ、そしてその船に種を収める収穫祭が行われました。子供等は、思い思いの船を作りうれしそうに種を収穫していました。

同日、下通では、参加していた計18店舗が、メッセージの書かれた種入りの包みを日比野さんに渡しました。年貢種を納めるようにして、この日終了を迎えました。

上通の朝顔は、お洒落なブティックやカフェのお客さんの視線を浴びて、緊張しながらも育っていたようですが、枯れるのも早かった為に、一番に収穫祭を行いました。

朝顔カーテンをつくり、緑の安らぎを与えていた美術館の朝顔は、正面玄関に発生した光化学スモッグにより一時病気になりましたが、安全地帯へ避難した後は回復し、たくさんの種をつけました。運営の花にはまだ青い種が残っていましたが、採種後に乾燥させることとし、惜しまれての撤去となりました。

そして11月30日、熊本最後の朝顔収穫祭を新市街で行いました。夜間照明に悩まされていた新市街の朝顔のために、後半は夜間照明を遮る為に簾をかけて夜を作りました。そのおかげで、運営ですが花をつけ、その花からなった貴重な種を採種。

まだ、種が乾燥していなかったため、ビルの裏の非常階段に籠を運び、乾燥させることにしました。

この収穫された全ての種と、全国10地域で育った多くの種とが、明後日朝顔プロジェクト2007熊本の集大成として展覧会HIGO BY HIBINOに集結します。約7ヶ月、朝顔と向き合って見えた、このプロジェクトが作り出す人と人や地域の結びつきのおかげで、美術館も何か一つ成長したような気がします。種は船のようだと言われる日比野さんと朝顔の種が、出会うべく所に運んでくれたように感じました。

2007年は全国で展開された明後日朝顔プロジェクトですが、今後の動きが楽しみですね。(M.H)



第19回熊本市民美術展 熊本アートパレード開催 菊畑茂久馬講演会 & JGビッグバンド ジャズライブ開催

第19回熊本市民美術展熊本アートパレードを開催しました。(2007年11月3日~18日)熊本城築城400年を迎えた今回は「ときをこえて」をテーマに作品を募集、のべ324点の力作が出品されました。開催前日には入賞された方々の表彰式が和やかな雰囲気の中で行われ、審査員の菊畑茂久馬さんも出席されました。

11月4日にJGビッグバンドによる「音楽の秋、Swingの秋 JGビッグバンド ジャズライブ」を開催。結成から30年以上、熊本市内を中心に活躍されている社会人ピックバンド、JGピックバンドの皆さん、金管楽器の美やかな音色が美術館内に響き渡り、熊本アートパレードは一気に盛り上がりました。

また、11月11日には熊本アートパレードの審査員を務めて下さった菊畑茂久馬さんの講演会、モク菊畑茂久馬さんのモクモクトーク「反芸術、《天河》へ、そして幸人のこと」を開催。全国でも珍しいアンテバンダン形式(すべての作品を無審査で展示する)を取り入れたこの熊本アートパレードに、菊畑さんは「アンテバンダン方式の美術展はたくさんの豊穣を生み出す。たとえジャンルは違っていても根っこはみんな一緒。これからもどんどん続けていきましょう。」と温かいエールを送って下さいました。(N.I)



CAMK秋のピアノコンサートvol.4 2007.10.28

すっかりCAMKの恒例イベントになった、ピアノボランティアさんによる「CAMK秋のピアノコンサート」が開催されました。回を追うごとにピアノボランティアさんのレベルが上がり、切磋琢磨のよい機会になっていることを実感。毎晩開催している「ホームギャラリーコンサート」とはひと味違うコンサートになりました。(E.Z)



日比野克彦展アーティストトーク 2007.12.15

日比野さんとコラボレーションを行った熊本の伝統工芸を担う方々とともに、座談会式でアーティストトークを行いました。登壇者のみなさんは、肥後でまり同好会の龍田美知子さん、肥後象眼の白木良明(伝統工芸士)さん、丸尾焼(天草)の金澤一弘(伝統工芸士)さん、山鹿灯籠師の中島清さん、熊本県農業研究センターい業研究所の森崎和義さん、熊本県くすのき園の西山純郎さんでした。今回のコラボレーションを通してのそれらの現場の苦労話や、日比野さんとの交流のなかで感じたことなどをお話をされました。話の途中で、天草ハイヤと山鹿灯籠まつりの発生時間が同じであることなどが紹介され(しかも金澤さんの話によると、東京、高円寺のサンバ祭りをきっかけとしているそうです)、来年は合同で行われるといふのです!などという提案が提起されるなど、これから天草市と山鹿市の祭りの交流がはじまりそうな予感が感じられました!(*金澤一弘さんは丸尾會というハイヤの団体を主宰されています。中島清さんは山鹿灯籠まつりの説明の必需品、金灯篭のつくり手です。)トークのあとに開催された質問会では、美術を学ぶ高校生からの質問をきっかけに、日比野さんと同じ岐阜出身の方からの質問を受けて、中学生の時の美術の先生の思いでなどをお話し頂いたなど、たのしい交流の場となりました。(H.T)



平成19年度第32回熊本県高等学校美術展 2007.11.13-11.18

熊本県高等学校美術展が、熊本県立美術館分館で行われました。本展には、熊本市現代美術館賞を設けて頂くかたちで参加しており、表彰式に出席してまいりました。今回の熊本県現代美術賞に決定したのは、熊本県立大津高等学校2年の佐藤勇さんの『GIGA』です。佐藤さんの作品は、高校生がもつ若々しさが溢れたエネルギーとユニークなデザイン美でした。国宝『鳥獣戯画』(『鳥獣人物戯画絵巻』)の兎と蛙の取組み合いを、ご本人の好きな「マンガ」の特徴となっている擬音で彩ったもので、擬音の効果によって、その場の情境の活気までが伝わる仕上がりとなっています。画面全体の構成は、もう少し整理を要しますが、今後どのように作品が展開されていくのかが楽しみです。展覧会全体としては、平面が多く、洋画に関しては力作も多数見受けられました。多様な表現方法が可能な今日、彼らがどのような方法で自らの表現を開拓していくのか非常に興味深いです。(A.A)



議会棟美術館展示替え 2007.11.16

熊本市役所のお隣にある熊本県議会棟に、議会棟美術館と題して、各委員会室に当館の作品を展示しています。本日作品の展示替えを行い、井手宣通、海老原喜之助、川上尉平など熊本郷の西家による作品34点と共に、2007年度の議会棟美術館が開幕致しました。



熊本の華人展vol.4 前期2007.11.23-11.25 後期2007.11.30-12.2 いけばな1日入門WS(親子編)2007.11.25

今年で4回目を迎える「熊本の華人展」では、昨年好評だった和のコーナーに加え、当館所蔵作品(アトムカー、ナオミちゃん)とのコラボレーションに挑戦。華人たちの豊かな想像力を垣間見ることができとても楽しい空間になりました。また開連イベントとして、昨年に引き続きいけばな1日入門WS(親子編)を開催しました。「いけばなに主役があるなんて知らないかったです。あと、うれしくて楽しかったです」「ナオミちゃんがすごくかわいいかったです」(参加者アンケートより)(E.Z)



藤川いずみ21絃筝リサイタル～華やぎ～ 2007.12.2

熊本の華人展後期最終日のこの日、展示会場内にて21絃筝リサイタルを開催しました。藤川いずみさんは国内外で公演を行い、21絃筝者として作曲や制作活動をされています。リサイタルでは21絃筝ソロによる声譜詩集(ことたんしゅう)第1集<冬>と第2集<春>(三木穂作曲)を演奏していただきました。いけばなの大作の前で季節のバラードがしっとりと、また華やかに奏でられ、花にも負けない美しい音色が会場内に響きました。(A.T)



JAFRAアワード総務大臣賞を受賞しました。

熊本市現代美術館は、(財)地域創造が実施するJAFRAアワード総務大臣賞を受賞しました。平成16年度から創設され、今年度が4回目となるこの制度は地域の文化振興に功績のあった公立文化施設を顕彰するものです。平成19年度は全国から46施設の応募・推薦があり、○地域を豊かに活動するというビジョンに沿った施設運営がなされている。○先進的でテーマ性のある活動をしている。○個別作品の鑑賞機会を提供している。○住民との協働による文化振興の取り組みを行っている。などの審査基準で選考が行われました。審査の結果、熊本市現代美術館をはじめ全国で8施設が受賞しました。熊本県内では、初の受賞です。現代美術館が、今回受賞となった主な理由は「生人形をテーマにした企画展や、熊本県下21流派による「いけばな」の作品展など地域文化をプロデュースした取り組み、また、ボランティアによるロビーコンサートやモロードショーの実施、夜間開館の実践など「まちなか美術館」として、中心市街地の賑わいづくりに貢献したことから高く評価されました。開連して以来5年目のJAFRAアワード総務大臣賞受賞は、私たち職員にとって大きな励みになるものでした。現代美術にこだわった切り口で活動を続けてきたことが評価されたことで、今後の更なる活動意欲をさらにかきたててくれます。また、今回の受賞は、財団の取り組みだけではなく、美術館にかかわる多くの皆さんのおかげであると認識しています。これを機に今後も皆さんの期待に応えられるような美術館であり続けたいと思います。(C.Y)

(参考)地域創造は、総務省の外郭団体、地方公共団体が主体的に取り組む芸術文化活動を通じた地域づくりの事業を財政的に支援するほか、財団の自主事業として人材育成や公立文化施設の活性化を図る事業など、多彩なプログラムを実施しています。

命の花壇に冬の花々が植えられました。 2007.12.4

熊本養護学校農芸班の生徒さんと先生方が、命の花壇に冬の花を植えに来てくださいました。今回植えられた花々は、ビオラ、アリッサム／ナデシコ／スック／ノースポールの5種類です。寒い中一生懸命植えてくれた花は、冬を越えて2008年の春まで玄関を彩ってくれます。美術館にお越しの際は、ちょっと足を止めてみてくださいね。(S.Y)



CAMK人形劇「てぶくろ」「マーシャとくま」 2007.12.23

人形劇団チャバによる「てぶくろ」と「マーシャとくま」がホームギャラリーで開催されました。てぶくろの中に動物たちが次々と入っていくシーンでは、子どもたちの「うわー」という声が響き、マーシャがくまに見つかりそうになるシーンでは、息を飲む子どもたちのくるくる変わる表情が印象的でした。(E.Z)



HIBINO CUP KUMAMOTO開催！ 2007.12.16

日比野氏が日本で行っているHIBINO CUP(読み:ヒビノ・カップ)。「HIGO BY HIBINO」を記念して、社団法人 熊本青年会議所の協力のもと、熊本でも開催されました！ HIBINO CUPは、設球のゴール、エアバッキンのボール、Tシャツでユニフォームを作成し、大人も子供も5人1組で楽しめる、サッカー形式のアートワークショップです。日本サッカー協会から派遣された元日本代表サッカー選手の前園真聖氏や、来年からのリーリング参入が決定したロッソ熊本の選手達も駆けつけ、大変な盛り上がりを見せました。私もサッカー仲間を務めて大会に参加しましたが、一番印象に残ったのは、仲間とコミュニケーションを取りながら、ゴールやボールやユニフォームを作っていく午前中の作業の時間でした(城東小学校の体育館をお借りして行われました)。成人男性5人集まってどうなることかと危ぶみましたが、意外とみんなやる気になって、ゴールやボールが形になるほどに熱中していました。どのチームも体当たりで戦い、そのなかで優勝に輝いたのはタイケン松橋FC、2位は城山小2年3組ゆかいな仲間たち、3位はボランキーでした。グッドデザイン賞に輝いたのは、メタルワーカーズでした。武者返しの反りが決め手だったようです。ちなみにこのチームは、今回開催会作品の熊本伝統工芸とのコラボレーションにもご協力いただきました。肥後象白木家のみなさんのチームでした。なんとチーム名も、HIBINO CUPの応援に駆け付けてくれましたよ。こどもたちも大喜びでした。今回参加した全ての人にとって、自分達の作った手作りの道具を使って遊ぶということは、めったにないことだったと思います。大人も子供も本気になってプレーを楽しみ、忘れられない思い出になったことでしょう。(K.M)



階段ギャラリーの展示替えをしました

■五福小学校3年生の作品展
2007.12.8-12.23

色々な形のマカロニをたくさん使って制作した額の作品展。金色に色付けしたマカロニの額縁はとても美しいものでした。額には、夏休みの思い出を俳句と絵に込めた色紙が添えられていました。(N.I)



■からくり人形作品展 熊本市立春竹小学校6年生
2007.12.28-2008.1.19

おばけの金太でよく知られる厚鍛新八郎さんに習い、それぞれに自分の将来の夢をからくり人形で表現。頭にある紐を引くと、口がきちんと動きます。夢いつばいの明るい未来の姿が眩しいくらいに輝いていました。(N.I)



「日比野克彦 HIGO BY HIBINO展」石垣プロジェクト:ダンボールで石垣を作ろう！ワークショップ開催中です！

現在開催中の「日比野克彦 HIGO BY HIBINO展」の会場内では、ダンボールで石垣を作ろう！ワークショップが進行中です。熊本城築城400年を記念して、熊本市民と、美術館の中にダンボールでできた石を積んで石垣を要いてしまおう！！という日比野さんのアイディアから生まれたこの石垣プロジェクト。現代版「肥後の石工」と呼ばれるボランティアさんと会場を訪れるお客さんたちの手によって、目標4000個！を合言葉に日々石が増え続けています。石垣の部屋ではちいさなお子さんからおじいちゃん、おばあちゃんまでみんな一生懸命ダンボールやカラーチップと格闘中。その様子は石工ボランティアさんから立ち上げてくれた「石工ブログ」にて見ることができます。自分で作った石との2ショットはみなさん素敵な笑顔です。会期中はいつもでもどなたでも石垣作りに参加できます。石垣プロジェクトスペースは無料で入れますので、何度も石を作りにきてくださいね。(S.Y)
☆石工ブログ URL:<http://isigaki.jugem.jp/>



肥後でまりワークショップ 2008.1.19

1月19日に「日比野克彦 HIGO BY HIBINO展」の開連イベントとして、マイ肥後でまりを作るワークショップを開催しました。肥後手まりは、乾かしたへちまを芯にして、それに糸を巻いてきた「まり」に、刺繡糸で模様を施したもので、今回講師をして下さったのは、展覧会の「熊本の伝統工芸プロジェクト」で、日比野さんデザインによるオリジナルのてまりを作った肥後でまり同好会の皆さんです。皆さんの丁寧な指導のもと、てまり作りに没頭する参加者の方々の真剣な眼差し。小さなお友達は、お母さんと一緒にてまりの模様や色を相談するのに一生懸命。てまり完成後には、それぞれ作品をしっかりと手にもつてパチリ。初めての挑戦とは思えない、素敵なてまりがたくさんできました！(A.A)



GIII vol.49 描かれた熊本城-紙本・絹本・写真パネルを中心に」展 (2007.9.26-11.18)

本展覧会は熊本城築城400年祭を記念して行ったもので、赤星閑意や杉谷雪楓の描いた作品をはじめ熊本城を中心とした都市図を展示しました。熊本城以外の都市図は九州に範囲をしぼり、それぞれに傾向の異なる、鹿児島・竹田・延岡の3点の都市図を展示しました。これまで、都市図というジャンルは洛中洛外図や江戸図などごく一部の作品しか注目されませんでしたが、今回の展覧会では、都市図のなかでも近世城下図にスポットを当て、なつかつ、それぞれの傾向ごとの都市図を同時に展示することができ、多くの人に都市図の存在を知ってもらうことができたと思います。(N.I)



GIII vol.50 盆栽という名の宇宙vol.4 (2007.11.22-11.26)

今年で4回目となる「盆栽という名の宇宙Vol.4」が開催されました。会場内には日本盆栽協会熊本支部の皆さんのが丹精込めて育てた秋の銘品32席が並び、訪れた多くの方に熊本の盆栽芸術の広がりと奥深さを楽しんで頂くことができました。また、今年は「熊本の華人展vol.4」と同時開催ということもあり、美術館全体が風情豊かな雰囲気に包まれていました。(S.Y)



GIII vol.51 海老原喜之助と坂本善三 一熊本とパリを胸に抱いて (2007.11.28-2008.1.13)

これまで数々の熊本、九州のアーティストを紹介してきたGIII。今回は、熊本ゆかりの二人の画家、海老原喜之助と坂本善三をとりあげました。熊本とパリの地で画家人生の重要な時間を過ごした二人ですが、熊本での「再生」を経て、エコール・ド・パリの画家たちと交友したパリへと再び旅立った海老原に対し、坂本はパリ留学で新たな視点を得ると、故郷熊本で風土に根ざした抽象画を展開していきます。本展では海老原の給付けした陶器の他、坂本の油彩、水彩、版画をご覧頂きました。「坂本善三画集」(エティション・ミツムラ、1985年)の中で三浦洋一氏が「異象と抽象」「動と静」と表現した、2人の作品を展示した会場は雍とした、そして静謐な雰囲気に包まれました。(A.O)



SUITOTTO Kumamoto [スイット・クマモト]

本年度のスイット・クマモトは、熊本の華人インタビューです。
(インタビュアー:横瀬江美)

*いける=花を生かすことと考え、ここでは「生ける」と表記します。



【大和池坊編】

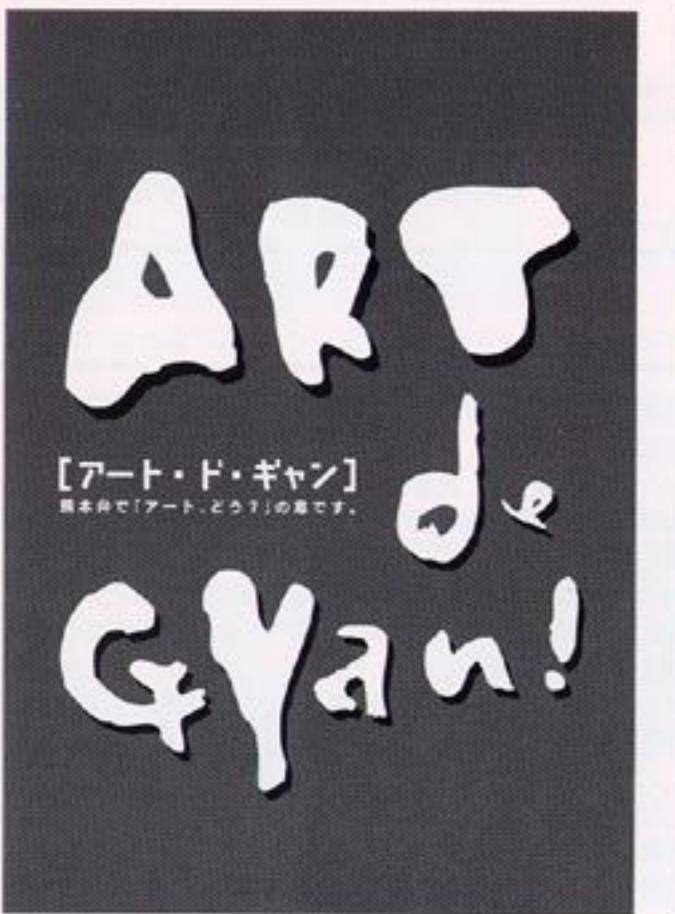
母が宏道流をしていたので、小さい頃から自然と花には触れていましたとおっしゃる中村精峰先生が大和池坊を始められたのは、東京に移られたのがきっかけのこと。水切りと花材の色合い、和の花には洋の花を混ぜないように特に気をつけているという先生に、いけばなをやっていてよかった点をお聞きしたところ、「花に夢になり、何もかも忘れてしまうところでしょうか。お花を生けるときは幸せを感じます。」と語られ、先生が生けられる花に表れているなと思っていたところ、「生ける人の性質があるので素晴らしいと思います。」とひとこと。いけばなの奥の深さを再確認させていただいた。どのお花も大好きですとおっしゃる先生には、ケイトウなどの存在感のある花がびつたりだと思った。

【養真流編】

とにかくお花を育てるのが好きで、その育てた花を生けることに喜びを感じますと語られた石原草汀先生。養真流という名前の由来は、「眞実を探求する」「眞実を養う」ところからきているとの聞きし、流派の名前ひとつとってもいけばな同様、深い意味が込められているのだと思って感じた。四季を通して育った花は表情や力強さが違いますし、花だけでなく、その花の育つ過程を枝や葉を通して知ることは生けるうえでもとても重要なことです。」とおっしゃる先生の言葉に、養真流の花を見ると、一貫して感じていた「花を大事にしている感じ」が分ったような気がした。ヤツツバキやヒヤシンスが大好きとおっしゃる先生の笑顔は、寒い冬の中、ほっこりあたたかな気持ちにさせてくれる福寿草のようだと思った。



熊本の華人展vol.4作品



「look and feel 4 デザインの展開図」展

2008.1.22-2.1 崇城大学ギャラリー
熊本市花畠町10-25 TEL323-1158

“デザインの展開図”というテーマの下、デザインが生み出されるまでのプロセスをも展示に組込んだユニークな展覧会。崇城大学芸術学部デザイン学科クロスマディアデザインコース、森野ゼミによる8点は、映像・CG、インスタレーション、書体、本等メディアは様々だが、各視点から「現代社会」と向き合い、膨大な量の時間、仕事、思考をも会場で表現した点において共通している。文字、言葉やコミュニケーションについて取上げる作品が多数だった中で、佐田美香は、匂いの形容表現を集め〈舌〉〈目〉〈心〉など六章からなる『匂本』を制作。眺めているだけで体が弛緩するような不思議な感覚とともに、言葉の喚起力に改めて気づかせてくれる一点であった。(A.O)



二人展(油絵)

2007.11.28-12.9 カフェサロン六花
熊本市水道町4-1アートビル2F TEL352-6114

正木憲之さんと工藤勇二さんの二人展。板井栄雄さんの絵画教室に通うお二人の展覧会。教室は月に2回。教室に通い始めて、正木さんは18年、工藤さんは2年になる。工藤さんは、先生の影響を受け、以前から描いていた穏やかで落ち着いた色彩の風景画から大胆な構図と色彩へと画風の変化が生まれた。正木さんの作品の中には、横たわる裸婦を雲に見立てて浮かべた斬新な構図もあった。正木さんと工藤さんという質感の違う、異色な組み合わせの展覧会、これからも教室に通う生徒さんたちとの展覧会をどんどん開催していきたいと正木さんは意欲的に語られた。仲間の皆さんとのどんなコラボレーションが生まれるのかこれからがとても楽しみである。(N.I)



長野良一

「あそ写絵展～布でつづる阿蘇」

2008.1.29-2.3 熊本県伝統工芸館
熊本市千葉城町3-35 TEL324-4930

写真家の長野良一さんの写真による、阿蘇の雄大な自然や可憐な草花を布に染めた作品展。ハンカチ、スカーフ、タペストリーなど、薄い布を使った軽やかでさわやかな空間が演出され、写真の楽しみ方を広げるものであった。今後も主題と素材の組み合わせなど、新たな展開を期待したい。(Y.H)

池坊熊本東支部 いけばな池坊展

2008.1.29-2.3 くまもと阪神8階催場
熊本市桜町3-22 TEL322-1111

池坊熊本支部創立40周年を記念して、池坊熊本東支部いけばな池坊展が開催。こどもたちへいけばなの楽しみを伝えることに力を注いでいる熊本支部ならではの学校華道や、伝統文化こども教室の作品も展示され、あたたかい雰囲気の漂う会場構成となっていた。冷え込みの厳しい外の空気とは違い、色とりどりの花々に囲まれて春を先取りしたような気分になつた。(E.Z)



FUJITA Hirobumi NODA Ryutaro SERVEと小品展vol.2

2008.1.16-2.24 ギャラリー楓
熊本市神水1-14-23 TEL382-8320

当館で2006年に開催した「アルス・クマモト」展にも参加頂いた藤田ひろふみさんと野田竜太郎さんの二人展。今回は、銅版画を中心に、藤田さんの作品16点、野田さんの作品6点が展示されている。ギャラリーに足を踏み入れると、まず目に入るのが、野田さんの水墨画《抑えられた衝動》である。「アルス・クマモト」展では不穏な何かを孕みながらも、それに耐える人物が描かれていたが、この《抑えられた衝動》では、それが一気に懾哭のような叫びとなって噴出している。エッティングや竹ペンで表された他の作品についてもそうだが、今回の野田さんの作品は、人が生きていいくなかで直面する様々な不条理を、人間の最も原始的で根源的な行為である叫びで見事に捉えている。一方の藤田さんは、《サビニの女の略奪》や《オダリスク》など過去の巨匠の作品からインスピレーションを得た作品を、《熊本城》シリーズと共に展示しているが、両者に共通するのは、先人が築いた偉大なものを藤田さんが現代の目で解釈し、新たな作品として昇華していることだろう。《熊本城》シリーズでは、石垣や瓦が一つ一つ緻密に描かれ、さらなる技術の向上が窺える。両者の作品群の延長線上としてある《Melody》は、藤田さんのこれまでの記憶や心象風景と、現実の世界が交錯した詩情に満ちた作品に仕上がっている。(A.A)



第48回熊日書道展

2007.12.11-12.16 熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

熊日主催のこの書道展は、県下で最大で最高の書道展であり、県内の書家が研さんの成果を競う場となっている。

今回は、漢字、かな、近代詩文、少字数、てん刻、刻字の6部門に509点の出品があった。その中から211点の入賞・入選がきまり、委嘱・無鑑査作家の72点の計283点が展示されていた。

審査員は、日展評議員の鈴木春朝氏と同理事の池田桂鳳氏であった。

グランプリの熊日賞は、大橋永佳さん(玉名市)のかな「秋二題」。県賞は小柳貞松さん(熊本市)の近代詩文「坊ちゃん」。熊本市賞は杉本京霞さん(熊本市)の漢字「過大染作」であった。会場は各部門とも多彩であり、漢詩や和歌の古典を中心、端正な漢字や流麗なかなで格調高く表現した力作が並び、活気に満ちていた。(S.K)



写真:熊日提供



アーティストがみずから作品(当館収蔵作品)にコメントをよせるコーナー「レター・フロム・アーティスト」。あわせてアーティストの最新情報をお届けします。

Letters from Artists

◎第9回／吉野辰海(よしの・たつみ)さん (from 日本)

1940年富城県生まれ。ネオ・ダグに参加。近年、ほぼ毎年企画展やグループ展にて作品を発表し、その世界の展開をあきらかにしている。

Q1《大首》についてお聞かせください。

《大首》については、その出来上る迄の経過を話した方がいいかも知れません。

1970年代に平面展開していた要素を、単純な形象の元素と閉じ込めて、それらが四散発散する役割の器(パッケージ)として犬が出て来ます。なぜ犬の器かというと、中にとじ込めた時代背景、私の友人・保護者の役割の犬がいたので、彼にその役割を荷(にな)ってもらうこととしたのです。それで出来たのが《投影装置の犬》です。

第2次大戦終結後の日本の美術状況、いわゆる現代美術といわれるせまい場においては、ヨーロッパ・アメリカ美術の流れに乗ったかたちで動いていたと思います。貧しい日本の消費生活の中に文章としてポップ・アートが出現するなどという少し変な状況が出てきました。私はなんとなく60年代後半あたりから少々の違和感を味わいながら、なんとなく自分なりの表現をと何やらやってました。一個人の消せないような記憶なり、視覚に焼きついているものなり、あるいは何をいえばいいか、1人の人間を形成している「感覚」「物象」を純化すれば、普遍化出来るんじゃないかなと思い、自分の中身を掘り起こして、探していくつましやかではあるが、ある象徴の風景を犬のお腹の中に作ったというのが《投影装置の犬》です。ファイバースコープで中を見るような仕掛けになってます。

2、3年して、このつつましやかな風景の要素がエーテルとなって膨張し、犬がゴム風船よろしく立ち上がった。

私の表現の原初から興味のあった、時間・運動が、捩(ねじ)れの運動となって現れる。犬の鼻が自動的に捩れてきた時は笑っちゃいました。捩れた犬はいろいろな表情の運動を見せ始める。「スクリュー」シリーズや、捩れの回転で得られる生と死。再生の力が雄犬で表される犬に女性性を与えられる。再生産する女性性から生命の水「アクアドッグ」シリーズなどを発展します。

そこで《大首》ですが、首だけの表現はスクリュードッグシリーズの初めから登場します。1990年の初めに大きめの会場で個展する機会に恵まれ、大きな捩れ首が登場します。哺

乳動物は顔面の表情に意味を見出すのが特性となっています。第2作目が熊本市現代美術館のコレクションの作品です。この首は大きな表情をしていません。むしろ唯見ているだけのような首です。私達人間に近い動物は、ただ生命体の形を見るという認識を示すだろうと思います。

Collection
Editor's Selection



《大首》1992年 高さ198.0cm FRP 熊本市現代美術館蔵

Q2最近興味のあること、作品の今後の展開について教えてください。

このところ制作している作品は、視覚的なものを頭(大脳皮質)で考えるというより、「見て」、「感じ」る、という方向に作り手として行きたいと思っています。視覚が交感神経と交感するなどと、いいながらです。

Q3今後予定している展覧会など、作品をみることができる場所はありますか?

九州方面では、福岡県朝倉市に黒川INN美術館(私立)というのがあります。そこに前記の第1号の《大首》があります。大分市美術館に《十字行》(高さ4.54m)、山口県宇部市にこれは一番大きな《大首》(高さ4m)が野外に設置されています。

Visitor's Letter

来館者のみなさまからのメッセージアンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介いたします。

◇アートパレード

・作風の似た作品をまとめて展示してあったので、とても見やすかったです。展示室内のレイアウトも毎回毎回変わるので驚かされます。おかげで毎回新鮮な気持ちで作品を見ることができます。(34歳、男性、熊本市内)

・ごたごたしてなくて静かでとても気持ち良く観ることができます。至福の時をすごせました。ありがとうございました。孫(小4)を連れてくるのは2度目ですが卓球をするのが楽しみのようです。(64歳、女性、熊本市内)

◇熊本の華人展

・アトムカーはふつうの道路で走れるのかなと思いました。できたら、私もアトムカーを作りたいです。(9歳、女性、熊本市内)

◇日比野克彦 HIGO BY HIBINO展

・日比野さんの伝統工芸とのコラボが興味深く、またその作り手の方の言葉や作業の様子がうかがえて、更に地元に対する興味も湧く。面白い企画だと思った。(31歳、女性、不明)

・ただの展覧会ではなく、地域の個性を活かしているところが今までにない。よかったです。せっかくおもしろい試みをしているのに、お客様が少ないのが気になつた。集客もがんばってください。(32歳、女性、熊本市内)

◇CAMKへのご感想

・姉に連れて初めて来ましたが、目と心で楽しませていただきました。今後通おうかなと思います。(18歳、女性、熊本市内)

・本がゆっくり読めて良かった。(52歳、男性、熊本県)

・館内はとても落ち着きます。いつもホッとできる空間です。(45歳、女性、熊本市内)



第7回 本田代志子
ロンドンの現代美術
2007年秋の展覧会より

2007年9月から11月まで、文化庁による平成19年度新進芸術家海外研修生として、ロンドンにてフェミニズム・アートを中心とする現代美術の調査をおこなった。現地では、フェミニズム・アートの雑誌「n.paradoxa」の発行人で、ケルシー芸術大学で教鞭をとるケイティ・ディープウェル氏が、かつて熊本市現代美術館のインターナショナル・アドバイザーをつとめていたこともあり、助言をいただきながら情報を収集した。その期間中の2007年の9月から11月にロンドンで開催され、話題となった現代美術の展覧会を紹介したい。

サーベンタイン・ギャラリー・パビリオン オラファー・エリアソン 2007.8.24-11.4

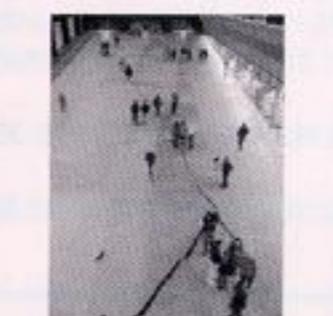
サーベンタイン・ギャラリーは、入場無料で近現代美術を紹介する美術館で、マシュー・バーニーの「拘束のドローイング」展を開催中で盛況であった。今年の夏限定のパビリオンのデザインは、現代美術家オラファー・エリアソンとノルウェー建築家チエーティル・トーセンによる。らせん状のテラスを周りながら上へ行くと、公園を広く見渡すことのできる展望台ともなり、開放感にあふれていた。そのスロープの開口部には上下に糸が張られ、移動とともに柔らかく変化する光の表情をとらえることができる繊細さを備えていた。内部は階段状のベンチ、自然の太陽のような光源を設置したカフェで、レクチャーの会場としても使用されていた。パビリオンと公園、スロープとカフェといった内部と外部の緩やかな境界線や、スロープ周囲の糸の張り方によって生み出される視覚的多様性など、エリアソンらしく私たちが自然にふるまう行動のなかで、小さな喜びを見ることができる可能性に富んだ空間であった。



テート・モダン タービンホール

ドリス・サルセド 《Shibboleth》 2007.10.9-2008.4.6

昨秋の一冊の話題となつたのは、コロンビアの作家ドリス・サルセドの《Shibboleth》である。美術館入口のタービンホールと呼ばれる吹き抜けのスペースの既存のコンクリートの床に亀裂をいれた作品である。入ってすぐの壁際の小さなひび割れ状の線から始まり、176メートルあるスペースの奥に行くにしたがつて、亀裂は広がり、深さも増していき、その断面には鉄のフェンスが埋め込まれている。この作品タイトルのShibbolethには、特定の社会集団や階層内で使われている慣習や合言葉という意味があり、サルセドは、人種差別や植民地主義など、社会のなかのさまざまな隔たりをテーマにしている。この作品が公開されて間もなく、現実の溝であるとは思わず落ちた人がいたこともあって、メディアでも話題となっていたが、何よりも、この作品の力強いメッセージ、そのスケールの大きさは比類なきものである。年間入場者500万人の美術館に半年展示されることによって、多くの観客が、身体的体験によって、「社会の溝」を再考することは意義深いことである。この作品は2008年4月まで公開され、その後コンクリートを埋めなおす予定であり、溝の痕跡はいつまでも消えることがないだろう。



テート・モダン 「ルイーズ・ブルジョワ」 2007.10.10-2008.1.20

初期のドローイング、絵画から、ゴム、ブロンズ、大理石、近年の布を使った作品までを広く紹介する回顧展。テート・モダンの2000年のオープン時、ブルジョワの大型の蜘蛛の作品《Maman》がタービンホールに設置されたが、今回は美術館のテムズ川河畔側に展示された。出品作には、作家のアトリエでの思考のプロセスを再現するかのようなエネルギーで魅力的な小品から、さまざまな素材による洗練されたフォルムのものまで、多様性に富んでいた。

この展覧会にあわせて、10月27日に開催された講演・シンポジウムに参加した。講演はフェミニズム的な視点による研究を主としており、美術史家のリンダ・ノックリンほか、テート・モダンのキュレーターのフランシス・モリス、ロンドン大学のミニヨン・ニクソン、精神分析学者ジュリエット・ミッセルら作品解釈のさまざまな可能性が呈示された。なかでも、ノックリンがブルジョワの夫に大学で教えを受けた思い出や、出品作品のモチーフとなっている建物の個人的な記憶を語っていたことが、95歳のブルジョワを同時代人として強く実感することになった。

テート・ブリテン

毎年秋に恒例の「ターナー賞」(1984年よりイギリス在住で重要な活動をした50歳以下の現代美術作家に対して授与される)が今年初めて、テート・リバプールが会場となり、ロンドンではこの30年余りの歩みを振り返る展覧会が開催された。これまでにノミネートされ、受賞した作家、作品はいずれも興味深いものではあったが、その作家の代表作ではないため、「ターナー賞回顧展」(2007.10.19-2008.1.13)は全体的に印象が薄いものであった。なお、この展覧会は2008年に森美術館で開催予定である。

美術館で同時期に開催されていた、19世紀後半にラファエル前派の一人として活躍した画家の「ジョン・エヴァレット・ミレイ展」(2007.9.26-2008.1.13)は、美術館収蔵品の堅実な研究成果が形となった展覧会であった。本展も今年、北九州と東京で開催予定である。

今回のロンドン調査では、さまざまな場面においてアートの世界の広さを実感した。テート・ブリテン、テート・モダン、大英博物館等の常設コレクションは入場無料であるが、3ポンド程度の寄付が求められている。企画展は10~15ポンド(約2500~3700円、通常ミニ・リーフレット付)である。美術館主催のシンポジウム、レクチャーは20ポンド(約5000円、コーヒー一杯付)、事前予約制で、定員100-200人であるが、多くの場合は完売し、当日では参加できないことも度々あり、アート人口の多さに驚いた。

また、展覧会、イベント等には多くの企業が協賛をしており、アートを支える環境が充実している。そのため、多様な催し物があり、活気的で魅力的な場所と広く認められ、いるといえよう。

また約300あるといわれている商業ギャラリーがある。中堅のギャラリーでは国際的なアーティスト、小規模のギャラリーでは若手の作家を紹介しており、ロンドンの美術系大学の卒業生が大半を占めている印象を受けた。ギャラリーの規模や方針、作家選定に幅があり、世界の作家を、個人コレクターや美術館向けに紹介、販売といった、アート市場の大きさと多様性を実感することになった。

このように、ロンドンの美術を取り巻く環境では、多くの美術系大学、作家、ギャラリー、コレクター、美術館、そして観客といったアートに関わる人口が圧倒的に多い。美術に触れる機会を提供する側の者としては、多岐にわたる展覧会、プログラムを提供し、幅広い世代が、アート鑑賞、美術文化事業支援など、多様な関わりをもちながら、歩んでいけるような環境づくりへと、地道に継続的に活動をつづけていかなければならないと感じた滞在であった。

編集者一覧
年も明けて、熊本が一番寒い季節もすぎ、春はもうすぐですね。
今回の号は、熊本アートパレードから華人展、日比野克彦展オープンまでと盛りだくさんの報告となりました。
今年度のAKL(33号～)は、毎号日比野さんに関するイベントや記事を掲載してきましたので、バックナンバーを振り返ると、展覧会開催までの大きな流れが浮かび上がってくるようです。ぜひみなさん、HP等でチェックしてみてくださいね。
本年も、AKLをどうぞよろしくお願ひいたします。

編集長 富澤治子

●執筆者一覧 × ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記しております。

善城昌山
Syozan Kaneshiro (書道家)
森山淡草
Tanso Moriyama (書道家)
本田代志子
Yoshiko Honda (熊本市現代美術館主任学芸員)
藏座江美
Emi Zozza (熊本市現代美術館学芸員)
富澤治子
Haruko Tomisawa (熊本市現代美術館学芸員)

坂本誠子
Akiko Sakamoto (熊本市現代美術館学芸員)
芦田彩葉
Aki Ashida (熊本市現代美術館学芸員)
竹田 茜
Akane Takeda (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
伊豆菜々
Nana Izu (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
矢加部 咲
Saki Yabae (熊本市現代美術館学芸アシスタント)

小山朝日香
Asuka Oyama (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
山田千鶴
Chiaki Yamada (熊本市現代美術館事務局次長)
員原賢一郎
Kenichiro Mahara (熊本市現代美術館主事)
橋本真紀子
Makiko Hashimoto (熊本市現代美術館主事)

●発行元/ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.36
2008年3月発行(春号) ◎無料◎
●発行人/南嶋 宏 編集長/富澤 治子 ●印刷/コロニー印刷
●デザイン/(有)松永 社デザイン事務所
●発行/熊本市現代美術館 TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892